

福島報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 小川 尚子
編集 同 広 報 部

【巻 頭 言】

学校教育においてもグローバル人材の育成を

川俣町教育委員会教育長 佐久間 裕晴

最近、私の手元に届く教育に関わる雑誌や小冊子の中に、「サステナビリティ」や「リフレーミング」などの横文字や「教育におけるVUCA」や「AARサイクル」など頭文字を使って表す用語、EdTech（エドテック）などの造語が文中にちりばめられていることに気付く。おそらく平易な日本語で表現するには限界があるからなのだろう。あるいは、最新の教育事情を鋭く新鮮な感覚で表現したいがためなのだろうか。その意味することが理解できていない私には、読んでいて乾いた脳も目も疲れる。時にAIモードのお世話になり意味することを確認してから紙面に戻るが、ほとんどは最後まで読み切れない。

しかし、そんな私にも、経済界で使われている「グローバル」という用語の使い方が気に入っている。もしかすると、これから先の教育のキーワードとなるのではないかとも思っている。「グローバル」とは、グローバル（地球規模の）とローカル（地域的な）を組み合わせた造語で、グローバルな視点を持ちながら、地域の特性や文化を尊重し適応させることの意味合いで使われるようになったとのこと。元は、海外市場に進出した日本企業がマーケティング戦略の一環として使われ始めたのがきっかけで広まったとのことだが、今や経済界では、グローバル人材とかグローバル化するなどと広がっているとのことである。一方、教育においては、かつて環境教育が学校に導入されたとき、本気で覚えた『Think Globally Act Locally』（地球規模で考え、足下から行動しよう）という基本理念と似ていたからなのか、やけに腑に落ちている。

今、地域に根ざす学校教育の営みにおいて、グローバル的な考え方や活動をもっと重視していくべきではないかと考えている。言い換えればグローバル人材の育成こそ学校教育で担うべきだと考えている。以前この紙面に書かせていただいた、子ども自身が社会の一員として、地域の人や地域社会に果敢に働きかけることができる子どもを育てるためのアントレ教育も、グローバル人材を育む取組のその1つである。

これからも各自治体が持続的に発展していくためには、次代を担う人材の育成が不可欠であり、子どもたちのための教育行政、子どもたちのための学校は大きな役割と責任を担っている。

くしくも、次期学習指導要領の改訂に向けた方向性や主要な論点をまとめた「教育課程企画特別部会における論点整理」が公表された。その目玉として、「調整授業時数制度」が取り入れられることはすでに承知のことと思う。その制度の趣旨は教育課程を各学校の創意工夫により、柔軟に編成することで地域にある学校の特色や魅力を明確に示すことにあるという。今後更に各部会等で議論され、学校現場での研究成果や課題により、制度がより具体化されていくのだろうが、子どもたちには、変化の激しいこれからの社会を切り開く力を獲得させねばならない。同時に地域と共にある学校として持続可能な地域づくりへの配慮も必要になってくるだろう。まさに、グローバル的な考え方を、日々の教育活動に取り組むことが求められるのだと思う。

ほんとに勝手な造語の造語になってしまうが、エド・グローバル（グローバル教育）を各学校においてもチャレンジしていただければありがたい。

今年度の活動を振り返って

福島地区行財政部長 車田 敦子

今年度の福島地区小学校長会行財政部は、人事の反省や要望活動の根拠となる調査研究、さらに、自校の人材育成に関するニーズ研修を実施し、各学校の課題解決の一助となるよう活動を推進してきました。以下に調査や要望等の概要をお示しします。

【令和7年度人事の反省】

- 教員不足の深刻な状況と改善
- 優秀な人材を確保するための採用の在り方
- 管理職の働き方改革及び処遇改善

【行財政調査Ⅰ 教職員配置等調査】

- 復興推進加配をはじめとした加配措置の継続
- 教育相談充実のためのSCやSSWの切目のない長期派遣
- 多様化・複雑化する学校の諸課題への対応（チーム学校）

【行財政調査Ⅱ 教育施策実施状況調査】

- 学力向上や不登校対応に大いに効果がある少人数教育の継続
- ICT環境の整備及びICT支援員の増員
- 特別支援学級の編制基準の見直しと環境整備の充実

【特別調査 大震災・原子力災害や感染症の影響調査】

- 教員業務支援員の継続配置と勤務時間の延長

【行財政部ニーズ研修会】

- 「自校の人材育成を考える」をテーマにグループ協議を行い、各校の課題や解決に向けた取組について共有した。

行財政部の活動は地区中学校長会や県小学校長会と連携しながら進めています。今後も各校長先生方の学校経営に寄与することができるよう努めてまいりますので、引き続き行財政部の活動へのご協力をお願いします。

生徒指導部の活動について

福島地区生徒指導部長 冨田 貴俊

県小学校長会生徒指導部では、校長先生方のご協力のもとアンケート調査を実施して生徒指導の現状や課題を明確にし、要望活動にも活用を図っております。福島地区での主なアンケート結果についてお知らせいたします。

- SCは74%（前年比-1%）の学校で活用、1校あたりの平均活用回数は80.9回（前年比-1.9回）であった。SSWは50%（前年比+5%）の学校で活用、1校あたりの平均活用回数は4.2回（前年比+1.1回）であった。SC、SSWは80%以上が、児童の不登校や心のケアに係る対応に活用されている。（調査A）
- 不登校児童は70%以上の学校で認知され、児童数は230名余、うち改善傾向が見られる児童は約25%で、要因は「不安等情緒的混乱」「無気力」が多い。いじめを認知した学校は90%以上で積極的認知が進んでおり、どの学校でも起こり得るものであることが改めて確認できた。虐待は疑いも含めて約半数の学校で確認され、身体的虐待とネグレクトが多かった。暴力行為を認知した学校は約20%で、児童間が最も多く、対教師も発生している。（調査B）
- ネット・SNSの利用児童は、昨年度同様80%余であり、うち約70%が自分用の機器を持っている。ネット・SNSの利用については、「ネット上の知り合いとのメール等のやりとり」「悪口・嫌がらせ」「課金」等、トラブルが懸念される事案や、「睡眠不足」等の健康上の問題が挙げられている。（調査C）

上記の割合は県全体と同程度が多かったが、「いじめ」「虐待」「暴力行為」の認知について県の割合を上回っており、各校での積極的認知がなされていると捉えられます。今後も「課題予防的生徒指導」を重視した未然防止に努めるとともに、課題解決に向けて関係機関との連携・協働による対応を組織的に進める必要があると考えます。今後も地区校長会の先生方のご協力をよろしくお願いいたします。

第Ⅲ期研究2年次～校長の資質向上を目指して～

福島地区研究部長 高澤 里美

本年度は、副主題「福島に誇りをもち多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子どもを育てる学校経営と校長の在り方」のもと推進されてきた第Ⅲ期研究の第2年次でした。この集大成として8月に開催された第54回福島県小学校長会研究協議会安達大会では、本支会から以下の研究内容について発表を行いました。

第6分科会視点1

「研究・研修」学校の教育力を高める研究・研修と校長の在り方

学び続ける教職員を目指し、資質能力の向上を図る研究・研修体制の充実【南方部】

第8分科会視点2

「危機対応」様々な危機への対応・未然防止の体制づくりと校長の在り方
教職員の高い危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり 【北方部】

第10分科会視点2

「社会との連携・協働」家庭や地域等との連携・協働及び学校段階等間の接続・連携と校長の在り方
学びと成長の連続性を重視した学校段階等間の接続・連携の推進 【西方部】

併せて、信陵飯坂方は、第9分科会視点1を、東方部は、北方部と同じく第8分科会視点2の研究を推進してきました。各方部の研究成果は、福島支会における各校の学校経営の充実に向け、非常に参考になるものばかりであり、校長の役割の明確化と指導性の向上に大いに寄与するものです。

今後は、令和9年度に本県において開催される第79回全国連合小学校長会研究協議会福島大会を念頭においた第IV期研究の推進に向け、各方部が選択した研究テーマに沿って計画立案・実践に取り組んでいきます。

特集

地域の温かな支援で感性を磨く

福島市立笹谷小学校 旗野 礼子

本校では、全学年で地域に根差した「本物」から学ぶ活動を大切にしています。低学年の生活科では、地域の方々の優しさに触れる機会を設けています。1年生は、地区内3つの保育園・幼稚園との交流を行い、2年生の町探検では、お寿司屋さんやお茶屋さんで本物のおもてなしに触れ、街の温かさを実感しました。3年生はリンゴ農家さんに栽培を学び、収穫後は農協の方とジャム作りを体験。4年生は「栗本堰」の学習を通じ、地元の方から先人の苦勞を聞き、今の生活の礎を知りました。5年生は福祉について、手話や車椅子等の体験を通して自分にできることを考え、その成果を保護者に発信しました。そして6年生は、地元企業応援事業を活用したフラワーアレンジメント体験に取り組みました。プロの技に触れ、花を生けることで豊かな感性を育みました。このように、本校の学びは常に地域と共にあります。各学年で出会った方々の思いや情熱、そして優しさは、子どもたちの豊かな人間性の土台となっています。地域の人・物・歴史と深く関わる経験が、自ら考え行動する主体性を育てています。今後も、地域社会との繋がりを大切にし、子どもたちを育て参ります。

「寄り添う」ということ

福島市立鎌田小学校長 神尾 孝弘

私がまだ、20代の頃の話です。「学期末のテストで、国語も算数も学級平均が80点以上になるようにしよう」という目標を学級で決めて、取り組んだことがありました。学級の子どもたちはみんな頑張り、見事に目標を達成したのです。私は、それが嬉しくて、「目標達成です！まとめのテストで、国語も算数も学級平均80点を超えました。」と学級便りに書きました。保護者からの反応が楽しみでした。次の日、ある保護者から、「学級便りを読みましたよ。よかったですね。」と言われました。私は、益々嬉しくなりました。「みんな頑張りました。目標が達成できて、本当によかったです」と言おうとしたそのとき、その保護者が笑いながらこう続けたのです。「先生、でもね、うちの〇〇は45点と60点だったんですよ。」

私はハンマーで頭を殴られたような衝撃を受けました。そして、私は、学級平均という数値を追いかけ、一人一人に目を向けていなかったことに気づきました。目標を達成したと得意になっていた自分が恥ずかしくなりました。大切にしなければいけないのは、平均値ではない。一人一人がいかに伸びたか、どのくらい成長したかを追求することなのだ。学級平均はあくまでもその結果なのだ。

本校には、いろいろな児童がいます。勉強ができる子、運動が得意な子、逆にそれらが苦手な子。活発な子、引っ込み思案の子。特性をもった子、不登校傾向の子、問題行動を起こす子。でも、その誰もが「できるようになりたい」、「分かるようになりたい」と思って学校に来ています。「私を見て」、「ほくを見て」と心の中で訴えています。平均値ではない、一人一人に寄り添った指導をしよう。何に困っている？その言動の裏には何がある？何ができるようになった？…。その意識を全職員で共有して、一人一人の成長のために、今日も本校の教育活動は行われています。学習指導も、生徒指導も、保護者対応も、「寄り添って」を合い言葉にして。

方部日より

南方部の活動について

南方部長 佐藤和彦（蓬萊東小）

本方は1市1町の7校で構成されています。昨年度は10校ありましたが、松陵義務教育学校がスタートしたため、下川崎小学校・金谷川小学校・松川小学校がなくなり、大幅な人数減となっています。各校の在籍児童数は10名から570名までと幅は広く、立地条件も市街地・郊外・山間部などと様々です。方部研修会では、課題研究の推進、各部からの提案、情報交換などについて、毎回内容の濃い話し合いを実施しています。

本年度の課題研究では、「学び続ける教職員を目指し、資質・能力の向上を図る研究・研修体制の充実」について、前年度の研究を踏まえ、方部の各実践に基づいて研究をまとめ、福島県小学校長会研究協議会安達大会で発表しました。県内他地区の先生方と情報交換を行い、大変意義のある研究協議となりました。県大会で協議したことによる成果や課題を改めて確認したところです。

輪番制で学校経営上の課題等の話題を提供し、全員で話題について協議しています。近隣校の学校課題や今日的な教育課題についての意見や考えを聞くことができ、その後の判断や対策に大いに参考となりました。今後も方部全員の力を結集して研修を深め、校長としての資質の向上につなげていきたいと思えます。

集うことが温かい

北方部長 渡辺 博明 (野田小)

「それでは、各校から最近の様子をお話いただけますか。」

で始まる近況報告(時にはいつの間にかフリートークになる日もあり)にほっと胸をなで下ろします。

「いやあ、最近〇〇な事があったんですよ。」

「ああ、それならうちの学校でもありましたよ。〇〇な対応したらうまくいきましたね。」

否が応でも校長職は各校一人です。ですから、豊富な経験に裏打ちされた校長先生方のお話をざっくばらんに聞けることはありがたい限りです。参考になるばかりか、心の支えにもなっています。本音とユーモアを交えたトークに肩の力がすっと抜け、原点に立ち返ります。

研究にも真摯に取り組んでいます。本年度の研究分野は「学校安全」。テーマは「自ら判断し行動できる子どもを育てる安全教育・防災教育の推進」でした。前年度より「安全教育・防災教育を本当に生きて働くものになりたい」という思いのもと研究を進め、県大会での発表につなげることができました。これもチームワークのなせる技。

「集うことが温かい」心通う、居心地のよい北方部であるようこれからも邁進していきます。

西方部の活動について

西方部長 佐藤 友子 (佐倉小)

西方部は、10の小学校から構成され、在籍児童数は約10名から660名までと大変幅広く、立地条件も市街地、郊外、吾妻山麓と多様な地域特性を有しています。研修会においては、課題研究の推進とともに、学校の状況を共有する情報交換を大切にしています。この情報交換は、各校の立地や規模、抱える課題の違いから生まれる知見や判断事例を共有する貴重な機会です。「何でも話し合える」「知恵を共有できる」安心感のある場であり、自校での重要な判断や対応策を講じる際に大いに参考となり、校長同士が課題に立ち向かうための、なくてはならないネットワークです。

本年度の大きな成果としては、福島県小学校長会研究協議会安達大会における研究発表が挙げられます。第10分科会において、「学びと成長の連続性を重視した学校段階等間の接続・連携の推進」の視点で研究発表を行いました。これは、前年度の研究成果を土台とし、研究推進員を中心とした方部全体での取組の集大成です。十分な共通理解と協議を重ねることで、方部が一丸となって研究をまとめ上げることができました。発表当日も、県内他地区の校長先生方と活発な情報交換を行うことができ、研究の深化とともに、校長としての視野を広げる大変意義深い機会となりました。次年度以降も、西方部全員の力を結集し、多様な学校現場の視点から得た学びを、校長としての資質向上へとつなげていきたいと思えます。

役職定年となる会員の皆様のご紹介

◇ 令和7年度末で役職定年をお迎えになる会員の皆様をご紹介します。

小野 真 校長先生 (福島市立清明小学校)	佐藤 和彦 校長先生 (福島市立蓬萊東小学校)
佐々木 芳三郎 校長先生 (福島市立月輪小学校)	星 秀文 校長先生 (福島市立荒井小学校)
佐藤 友子 校長先生 (福島市立佐倉小学校)	小川 尚子 校長先生 (福島市立飯坂小学校)
蓬田 孝夫 校長先生 (福島市立湯野小学校)	長澤 昭仁 校長先生 (福島市立庭坂小学校)

※ 学校番号順のご紹介とさせていただきます。

いつもあたたかく私たち後輩会員を支え、導いてくださいました8名の校長先生方、本当にありがとうございました。これからもそれぞれのお立場からのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

編集後記

学校経営に情熱をもって取り組む姿、子どもたちや地域のよさを生かした教育活動、各専門部の具体的な研究の取組から、目指すべき学校の姿、あるべき校長の姿を学ばせていただきました。公私ともにご多用の中、原稿執筆等にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。心から御礼を申し上げます。

福島市立立子山小学校長 氏家 博行